□書　評□

「馬場塾の最新胃X線検査法」

馬場　保昌　編集
佐藤　清二　執筆
富樫　聖子
坂東　孝一
松本　史樹

福岡大学筑紫病院消化器科
八尾　恒良

1年ほど前，馬場先生に3か月だけのトレーニングを受けたX線技師さんが撮影した集検フィルムを見せて頂いて驚いた．私の病院で3年くらいトレーニングした医師が撮ったフィルムよりはるかに診断価値が高い写真だった．医師が撮影するルーチンX線検査も，何とか考え直さなければと思っていた矢先にこの本が出版された．

一読して感じるのは，新しい検査法を指導された馬場保昌先生の妥協のない学問に裏打ちされた，X線診断学に対する強固な信念と実力，そしてその素晴しさを肌で感じて一途にX線検査に打ち込まれた多数の技師さん方の時間とエネルギーである．まさに現代社会ではほとんどみられなくなった，“塾”の産物と言えよう．その成果もすばらしい．本書に示された資料によると全国の職域検診における胃癌発見率は0.04％であるのに対し，東京都予防医学協会の新しい検査法による胃癌発見率は0.07％，しかも早期胃癌率は80％に達している．また，癌研健診センターの成績では胃癌発見率は古い方法の0.14％から新しい方法では0.3％に上昇し早期胃癌率も67％から92％と驚くべき成績の向上をみている．それにも増して新しい検査法の価値は提示されたX線写真を見れば一目瞭然である．

今，分子生物学が花盛りである．しかし，早期胃癌の診断に関しては，胃癌とコントロールの遺伝子変異や多型の統計学的有意差に頼る手法では多くを望めまい．いずれにしても胃癌を見つけなければ始まらない．診断には形態学が“血の道”に勝る．であるのに，最近の早期胃癌診断のほとんどは内視鏡検査と生検に頼り，形態学がおろそかにされている．X線診断学も内視鏡診断学もそのレベルは低下の一途をたどっている．今やよく観察しない内視鏡検査が全盛であるが，その責任は医師によるX線検査法のレベル低下が一因ともなっている．

低下の理由は単純である．まず，大学の指導者が胃透視と血圧測定とは異なることがわかっていない．次に症例が少ない．トレイニーのルーチン検査は週に2～3例，これではいくら勉強熱心で優秀な医師でも，胃透視に自信をもった医師は育たない．胃透視に自信がない医師が外来を診ると胃透視の件数は減少し，結果的には仲間の腕も低下する．腕の低下した仲間同士ではいくらカンファレンスをやってもレベルは上がらない．現在の診断学の再構築には，本書の新しいX線検査法を取り入れ，簡単で綺麗なX線写真を撮ることから始めることが手っ取り早いように思える．

本書は素晴らしい本である．もし改訂されることがあれば，定価の問題もあろうが，折角の写真をもう少し大きくして頂きたい．また，X線検査でチェックできず内視鏡で拾い上げられた症例や，X線検査でチェックしたのに内視鏡で見逃された症例の頻度を明らかにしていただきたい．それがX線検査の重要性を再認識するきっかけになるであろう．

●B5　頁228　図23　写真592　色図1　表26　2001　定価（本体4,700円＋税）　送料実費

医学書院　刊（☎03-3817-5657）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2012

2026/09/25 01:05:42